



TITLE:

紀元前4世紀アテナイをとりまく商業活動を支えたメカニズムに関する考察——海上交易と銀行業を中心に——(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

杉本, 陽奈子

CITATION:

杉本, 陽奈子. 紀元前4世紀アテナイをとりまく商業活動を支えたメカニズムに関する考察——海上交易と銀行業を中心に——. 京都大学, 2019, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2019-07-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21979>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	杉本陽奈子
論文題目	紀元前4世紀アテナイをとりまく商業活動を支えたメカニズムに関する考察 ― 海上交易と銀行業を中心に ―		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、古代ギリシア人の生きた世界のあり方を、経済史と社会史の交差する分野に焦点を当てて解明しようとした研究である。研究史と課題を説明した「序章」に続く本文は2部に分かれたり、第I部は代表的なポリス・アテナイの社会と商業従事者との関係を論じた3章から成り、第II部は海上交易を支えた諸制度とその運用を論じた3章から成る。最後に「終章」が置かれ、本論文の総括と研究の展望が述べられている。</p> <p>紀元前4世紀のアテナイは、数多くの海上交易商人や銀行家たちが集まる、東地中海域における商業活動の中心地であった。ところが、こうした商業活動を主として担っていたのはポリスの中核的構成員である市民たちではなく、非市民たちであったことが知られている。本論文は、このような状況下で展開されていた商業活動が、いかなるメカニズムによって支えられていたのかを明らかにすることを目的とするものである。</p> <p>論者はまず「序章」において、研究史と問題の所在を説明する。</p> <p>論者によれば、紀元前4世紀アテナイをとりまく商業活動についての研究史は、古代経済の性質をめぐる19世紀末以来の論争の中に位置づけることができる。この論争は、古代経済の原初的性格を強調するプリミティヴィズムと、古代にも近代的な市場経済の存在を認めようとするモダニズムとの間で争われたものであり、1970年代以降はM・フィンリーの影響のもと前者が優位を占めるに至った。そしてその結果、古代経済が発展しなかった背景として、商業の担い手がポリス社会の「アウトサイダー」であり国家が経済に関心を向けなかったという点が強調されるようになった。論者は研究史の流れを以上のように捉える。</p> <p>近年では古代経済の規模を再評価する動きが強まる中で、こうしたポリス社会と商業との関係のとらえ方についても見直しがすすめられており、とりわけ前4世紀のアテナイに関しては、穀物不足が深刻化する中で国家が商人の誘致に取り組んでいた様子に注目が集まっているが、これらの研究はアテナイ側の対応を分析対象としているために、実際の商業活動の担い手であるはずの海上交易商人や銀行家たちの側にはほとんど目を向けていないという問題がある。換言するならば、現状では商業活動を支えた「制度」についてポリス側からのみ検討しているために、非市民が多数を占めているはずの商業従事者たちがなぜその中に組み込まれているのかについては、十分に</p>			

説明できていない。論者はこのように研究の現状を厳しく批判する。そして、論者は、商業活動の担い手側の視点を含めて「制度」の実際の運用面を明らかにすることで、前4世紀アテナイを中心とする商業活動を支えていたメカニズムを解明することが重要だとする。本論文は、以上のように指摘した課題を果たそうとする論者の試みである。

研究史の批判的整理と問題意識を「序章」で述べたうえで、論者は第I部において、「アウトサイダー」説の再検討をとおして商業従事者とアテナイ社会との関係について考察する。とりわけ、先行研究では「アウトサイダー」に対置される存在として、定住して農業に従事する生来市民が想定されていることから、ここでは法的身分、人間関係、職業という3つの観点に即して検討を行っている。

まず第1章で論者は、顕彰により付与された特権に注目することで、商業従事者の法的身分について検討している。当時のアテナイでは、ポリスに貢献した外国人に対して、本来は市民のみに認められていた特権が付与される場合があった。従って、商業従事者たちに与えられた特権を分析することで、彼らが法的身分という点でアテナイ社会に受け入れられているかどうかを判断することができると考えられる。このような観点から顕彰決議碑文を分析したところ、論者は商業従事者への特権付与には以下のような特徴があることを読みとった。

まず、銀行家に関しては市民権が付与されている例を複数確認することができるのに対し、海上交易商人についてはそのような例を見出すことができないこと。また、市民権ではないものの市民と同等の権利を部分的に認めるものとしては、従軍・エイスフォラ特権、土地所有権、イソテレイアの3種類が存在するが、このうち交易関連奉仕を行った海上交易商人に付与されたのは、イソテレイアを除く2種類であったこと。さらに、イソテレイアについて詳細な検討を行ったところ、この特権は軍事的な貢献に重きを置く共同体意識を背景として付与されていたこと。以上が浮かび上がった。つまり、アテナイでは前4世紀に海上交易商人たちの重要性が高まっていたものの、そうした状況下でも外国人商人を完全に共同体の中に取り込むことはしなかったのであり、その意味では彼らは「アウトサイダー」でありつづけたとみなすことができる。論者はこのように結論づける。

続く第2章では、特に銀行家に注目して商業をとりまく人間関係について検討した。論者は、銀行家の人的紐帯が読みとれる事例を網羅的に分析し、銀行家が利用者との間に継続的な協力関係を形成しており、このことが銀行経営の根本部分を支えていたことを読み取る。そして、そのようなネットワークの中には市民の政治家や軍事遠征を行う富裕者たちも組み込まれていたとみる。つまり、銀行家のネットワークがアテナイ社会内部の市民ネットワークと深く結びついていたこと、そして、そのこと

によって銀行経営のみならず、アテナイの政治や軍事も支えられていたことを明らかにしたのである。このことを踏まえて、論者は、銀行家を人間関係の点でアテナイ社会の「アウトサイダー」とみなすことには問題があるとする。さらに、このような銀行家ネットワークは契約文書の有効性を担保するという形で、海上交易商人たちが円滑な商業活動を行うことにも貢献していたことも確認する。海上交易商人に関しては銀行家のようなアテナイ内部のネットワークとの密接な結びつきはほとんどみられないものの、銀行家に頼ることで、アテナイにおいて信用できる者を確保することができたといえる、と結論する。

第3章では、職業イメージが商業活動に与えていた影響について分析を行っている。論者はまず、特にプリミティヴィズムの立場に立つ先行研究で強調されてきた商工業蔑視について再検討し、それらはいずれも商業活動を妨げるようなものであったとはいえないことを史料から読みとる。とりわけ、法廷弁論のように社会的価値観を反映する史料の中にそのような蔑視がみられないことが、少なくとも法廷の場では商業に対するネガティブな評価が効力を持っていなかったことを意味している、とする。むしろ、銀行家に関しては信用できる者としての職業イメージが積極的に用いられており、このことが銀行家のリスクを軽減させる役割を果たしていた。そして、このことは、たとえ彼らが農業従事者ではないという意味では「アウトサイダー」であったとしても、そのような他者認識は商業活動を支えるものとして機能する場合すらあった、と主張している。ただし、海上交易商人については、自身が当事者となる法廷の場で職業イメージを効果的に利用することは難しい状況にあったということも論者は確認している。これは、海上交易商人にとって関与する可能性が最も高い法廷である商業裁判では、当事者の双方が商人であることが多かったためであると考えられるからである。しかし、それ以外の法廷においても穀物供給者としてのイメージが提示されている例がわずかに見られるのみであったことから、海上交易商人に関しては、銀行家のように社会との密接なかわりを背景とする職業イメージは形成されていなかったといえようと論者は結論づけている。

このように、第I部の検討結果から、論者は商業従事者が社会から切り離されているために商業活動が妨げられたとする説は受け入れがたいとする。その一方で、論者は次のようにもいう。すなわち、商業従事者とアテナイ社会との関係については、銀行家と海上交易商人とでは事情が異なっていたことも浮かび上がった。つまり、銀行家は法的身分、人間関係、職業イメージのいずれの点でもアテナイ社会内部と深く結びついており、そのことによって銀行経営が支えられていたのに対して、海上交易商人については、銀行家ほどにはアテナイ社会の中に入り込んでいなかった様子がかがわれた。そして、そうであれば、アテナイを中心として行われていた海上交易の運営面については、銀行家とは別の形で説明する必要がある。論者は、第I部をこのように

総括し、第II部での課題を示唆している。

第I部での考察を踏まえて、第II部では、海上交易活動を支えていたアテナイ内外の諸制度が実際にはどのような形で運用されていたのかについて、顕彰決議、司法制度、商船拿捕という3つの主要な要素に注目し検討を行っている。このうち、第4章で扱う顕彰決議と第5章で扱う司法制度は、前4世紀のアテナイが海上交易をとおして穀物供給を確保するために行った取り組みである。一方、第6章で論じる商船拿捕は、より広く当時の東地中海地域の国際関係とかわるものである。

まず第4章では顕彰碑文が検討された。前4世紀のアテナイでは交易関連奉仕を行った海上交易商人たちに対して顕彰が行われていた。その分析をすることで、論者は、ここには商人間の人的紐帯が深くかかわっていたことを明らかにした。そして、次のようにその理由を考察する。交易関連奉仕はアテナイだけでなく他の商人にとっての利益となる場合があり、そのような利益を受けた商人は見返りとして奉仕者のことをアテナイに顕彰対象として推薦していたが、このような行為は、商船保護のように市民の目撃者が少ない奉仕についての情報を提供するものとして、アテナイ側にとっても重要な役割を果たすものであったとみられる。つまり、交易関連奉仕への顕彰というアテナイの取り組みは、商人間の人的紐帯によって部分的に支えられる形で運用されていたのである。そして、海上交易商人たちの中には顕彰後も長期間にわたって奉仕を繰り返す者たちが多くみられたことから、このような関係は継続的に機能していたとみることができる。

続く第5章で論者は、海上交易商人が直接当事者としてかわるような司法制度として商業裁判と穀物輸送関連法の2種類に注目し、その運用面を分析した。まず、商業裁判については、アテナイの通常の私訴法廷との差異を説明する必要があると論者はいう。通常の私訴法廷では人間関係と法的拘束力という2つの点でアテナイ社会と結びついた市民たちが証言を行っていたのに対し、商業裁判では証人の多くは非市民であったことから、そのままでは証言の信憑性を担保することができないのである。

そこで、商業裁判における証人について論者が詳しく分析したところ、商業裁判では商業ネットワークが信憑性を保証する役割を果たしていたことが明らかとなった。一方、穀物輸送関連法に関しては、市民であれば誰でも、これに違反した市民または在留外国人を訴えることができたが、実際には商人が一時滞在の外国人である場合が多いことや、当事者と無関係な市民はわざわざ告発を行わない傾向にあったことを考慮するならば、この法はそのままでは十分に機能しなかった可能性がある、とする。ところが、商業裁判の中で間接的に相手の違法行為を非難するという方法をとれば、このような身分の問題を取り払うことができた。つまり、商人が自らにとって都合の良い紛争解決手段として商業裁判を選んでいたことが、穀物輸送関連法をより広く適

用させることを可能としていたといえる。論者は、海上交易商人と司法制度の関係について以上のように結論する

第6章では、さらに視野を広げて国際関係の中で海上交易活動をとらえるために、商船拿捕という観点から分析を行っている。その結果、商船拿捕をめぐる政治的友好関係が正当性の指標とされており、これはとりわけ拿捕を抑制するものとして一定の機能を果たしていたことを論者は明らかにした。その一方で、論者は、このような正当性の指標は必ずしも機能しない場合もあり、それは、国際関係の流動性、穀物輸送路の要所におけるアテナイの軍事力低下、傭兵の増加といった前4世紀の構造的要因によるものであったとする。ただし、実際には商人間の情報共有や商船の共同利用、さらにはむやみな拿捕を行うことが加害者側にとっても不利益となるという事情によって拿捕は回避される傾向にあり、結果的に商船拿捕の蔓延は抑えられていたとみられるとも述べている。

以上の第II部の分析から、論者は、顕彰や司法といったアテナイの諸制度と、商船拿捕を防ぐための国際的なルールの内いずれもが、それ自体では不完全なものであったことが浮かび上がったとしている。顕彰に関しては、海上で行われた奉仕について市民たちが情報を得ることは困難であった。また、司法制度のうち、商業裁判に関しては証人の多くが非市民であるため信憑性を担保することが難しく、穀物輸送関連法に関してはアテナイの市民や在留外国人以外には適用できないものであった。さらに、国際関係については、政治的友好関係が必ずしも機能するとは限らない状況にあったのである。ところが、以上のような構造的欠陥は、商業従事者が自らの利益を追求した結果として補完されていたということもまた明らかとなった。以上のように述べた後、論者は大きな役割を果たしていたのが商人たちの私的な人的紐帯であったと強調するのである。

終章では、本論文全体の検討結果をまとめて研究史に位置づけるとともに、今後の研究への展望を述べている。

論者はまず、前4世紀アテナイをとりまく商業活動のメカニズムを提示する作業について、その成果を以下のようにまとめている。古代経済の性質をめぐる19世紀末以来の論争の中では、商業従事者を「アウトサイダー」とみなすプリミティヴィズムにおいても、経済が社会から独立した領域を形成していたとみるモダニズムにおいても、商業活動はポリス社会から切り離されたものとみなされていた。近年の研究はこうした見方を修正し、ポリス社会が商業に関与していた様子を強調しているのであるが、そこではあくまでもアテナイ側のイニシアティブに重点が置かれている。これに対し、本論文の分析によって明らかとなったのは、このようなアテナイや国際社会の取り組みは実際には多くの欠陥を内包していたこと、そして商業従事者が自身の利益

を追求することでそれらが補完されていたことであつた。つまり、商業活動はポリス社会から完全に切り離されていたわけでも、ポリス側が一方的に定めた諸制度によって支えられていたわけでもなく、ポリス社会と商業従事者との間の密接なインタラクションの中で初めて運営可能となっていたものであつたのである。

本論文によって明らかとなつたこのようなインタラクションの性質は、前4世紀のアテナイをとりまく状況に特有のものであつた、と論者は考える。というのも、前4世紀は、それ以前と比べてアテナイの力が弱まっていたものの、ヘレニズム期のような私的な組織、大規模な恩恵施与、広域にわたる国際司法協定は未だ発達していないという過渡的な時期にあたるのである。このような状況下では、ポリスにとっても商業従事者の私的なネットワークに頼ることが最も現実的な手段であつたといえる。このように考えるならば、古代ギリシア世界の構造自体についても、従来のを大幅に修正する必要がある。つまり、少なくとも前4世紀の東地中海地域には、ポリス社会を中心としてその周辺に「アウトサイダー」が存在するのではなく、両者が互いに補い合うことで「制度」を共有するような世界が形成されていたのである。論者はこのようにその考察の成果から導かれる広い展望を述べて擱筆している。

(論文審査の結果の要旨)

高度で豊かな文化を築き上げた古代のギリシア人の世界については、彼らが生み出した独特の都市国家、ポリスが注目され、その構造を解明する研究が積み重ねられてきた。そこで重視されたのは、定住しておもに農業に従事し、政治に参加するポリスの中核的構成員たるポリス市民であった。一方で、ギリシア人は地中海を自在に航行して商業活動を展開していたことでも知られる。こうした商業活動を担っていたのは市民ではなく、土地所有権が認められない非市民であった。国家の死活に関わる穀物供給をも含む商業活動を担ったのは、市民ではない海上交易商人だったのである。こうした状況の中で、ギリシア人の商業活動はどのようなメカニズムによって支えられていたのか。本論文は、古代ギリシアの代表的なポリスであるアテナイを取り上げて、この問題を考察したものである。

古典期後期にあたる紀元前4世紀のアテナイは、東地中海地域における商業活動の中心地であり、数多くの海上交易商人が集まった。商人たちの活動は私的な融資によって支えられており、職業として今日の銀行と同じ役割を果たす者たちが資金を提供していた。当時のアテナイは慢性的な穀物不足に悩んでいたが、国家の商船を持つことなく、商人を自国に誘致することで穀物不足に対応しようとした。市民ではない商人たちの私的な活動が国家を支えていたのである。論者は、海上交易商人と銀行家を分析しながら、商業活動の実態を明らかにしようと試みた。そして、2部6章にわたるその検討から、従来の主要学説に修正を迫る重要な見解をいくつも提示している。

まず第Ⅰ部の検討では、商業従事者のうち銀行家は、法的身分、人間関係、職業イメージ、いずれの点でもアテナイ社会内部と深く結びついており、それによって銀行経営が支えられていて、彼らをアテナイ社会の「アウトサイダー」と見なすことには問題があることが判明した。一方、海上交易商人の方は、その重要性の高まりにもかかわらずポリス共同体には取り込まれず、ポリス社会の「アウトサイダー」であり続けたことも明らかとなった。しかし、論者は同時に、銀行家のネットワークが海上交易商人の円滑な商業活動に貢献していたとも指摘する。第Ⅱ部では、海上交易商人の活動にかかわるアテナイ内外の諸制度が、実際はどのように運用されていたのかをめぐって、交易関連奉仕を行った商人たちに対する顕彰の決議や商業裁判などの司法制度、そして商船の拿捕を分析したが、その結果、アテナイの諸制度や商船拿捕を防ぐ国際的なルール、いずれもが構造的欠陥を抱えていたこと、しかし、そうした欠陥は、商人たちが自らの利益を追求した結果として補完されていたという意外な事実を明らかにしたのである。

本論文の研究は、単に前4世紀のアテナイの実態分析にとどまるものではない。論者が扱った問題の背後には、19世紀以来の学界での大きな論争がある。この論争は、古代経済の原初的性格を強調するプリミティヴィズムと、古代にも近代的な市場経済の存在を認めようとするモダニズムとの間で争われたものであり、1970年代以降は前者の考えが優位を占めてきたが、そのために、古代経済が発展しなかった背

景として、商業の担い手がポリス社会の「アウトサイダー」であり、国家が経済に関心を向けなかったという点が強調されたのである。また、近年の学界では古代経済の規模やポリス社会と商業との関係を見直す動きが強まるようになったが、あくまでもアテナイ側のイニシアティヴに重点を置いている。総じて、いずれの立場の研究でも商業活動をポリスの側からのみ検討しており、実際の商業の担い手である海上交易商人や銀行家たちの側にはほとんど目を向けていないという難点がある。論者は研究上のこの問題点を鋭く指摘し、その再検討を図ったのである。そして、結論として、商業従事者が社会から切り離されているために商業活動が妨げられたとする説は受け入れがたいと結論したのであった。大きな論争の根幹に関わる部分に明快な意見を提示した論者の研究と結論は、今後の西洋古代史学界に重大な影響を及ぼすであろう。

本論文の重要な意義はもう一点ある。論者は、商業活動がポリス社会から完全に切り離されていたわけでも、ポリス側が一方的に定めた諸制度によって支えられていたわけでもなく、ポリス社会と商業従事者との間の密接なインタラクションの中で初めて運営可能となっていたと考えた。この見解は、従来のギリシア世界の見方の枠組みに対して修正を迫る。つまり、少なくとも前4世紀の東地中海地域には、ポリス社会を中心とし、その周辺に「アウトサイダー」が存在するのではなく、両者が互いに補い合うことで「制度」を共有するような世界を形成していたといえるからである。

本論文は、従来の研究がポリス側からのみ検討されてきた点を批判し、商業活動を商人側から観察するという独自の作業を実践した。そして、盛んになされた商業活動を支えたメカニズムをリアルに提示してみせた。さらに、ポリスを完結したものとし、その外に価値観を共有するギリシア人の世界が成立していたことを示して、従来の歴史像を修正する提案までしたのであり、画期的な研究の意義は高く評価できる。

論者は、ギリシア人が石に刻んだ碑銘や商業裁判を扱った法廷弁論を主な資料とし、精緻な分析を施して検討を進めるとともに、たいへん明晰で論理的な叙述で問題解決へと議論を進めており、論文を一貫性のある作品に仕上げている。経済行為を直接扱う史資料が残存せず、間接的で断片的な史資料を利用せざるをえないため、修辞の効いた法廷弁論の扱いなどは困難を極めるが、慎重に考証を重ねつつ結論を導いている。ただ、議論の関係上、「融資」「預金」「信用」など近代の経済の概念を使用せざるをえないが、その扱いについてはさらに吟味を必要とするだろう。この点については、古代経済と近代経済との間の差異を充分認識している論者の今後の研究が、より説得的な説明を追加してくれると期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成31年4月24日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。